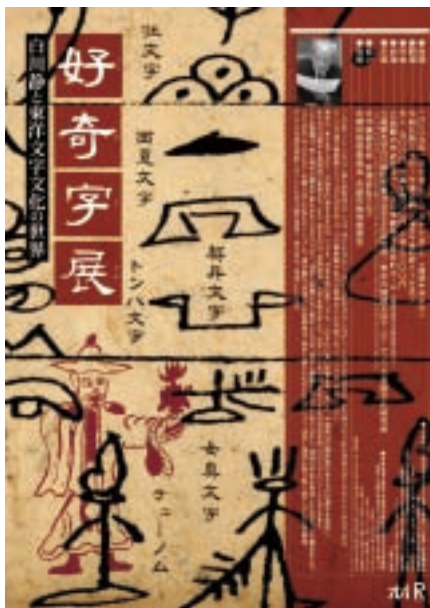


白川研究所便り



「好奇字展—白川静と東洋文字文化の世界」 ちらし

目次 ◆ index

第 4 号

発行

09.3.30

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-46663470
Mail toyomoji@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/
k-rsc/sio/index.html

当研究所の活動

研究所長 加地伸行

2

白川静先生と中島敦と

副研究所長 木村一信

3

水利碑刻

運営委員 本田 治

5

『甲骨学一百年』を読む会の報告

学生諸君との白川文字学勉強会

研究員 高島敏夫

7

二〇〇八年度 学術活動報告

運営委員 芳村弘道

10

二〇〇八年度 文化事業活動報告

文化事業担当 久保裕之

12

編集後記

運営委員 萩原正樹

16

当研究所の活動

研究所長 加地 伸行

私は、昨年五月から当研究所の所長に着任いたしました。その能力は不十分ではありますが、故白川静先生への深い思いから、引き受けさせていただきますました。よろしくお願い申し上げます。

大学当局から私に与えられました職務は、もちろん、当研究所の発展であります。その具体的内容は、研究・教育活動と普及活動という、研究所設立の趣旨そのものです。

つきましては、私なりの新しい方向づけを以下に申し述べます。

(一) 研究・教育活動

白川静先生の御業績は、あまりにも広範でありましたため、従来、その全体につきましての適切な紹介がなされていませんでした。

そこで、一般人・学生向けに、『白川学講座』全三巻刊行を企画しました。第一巻は文字学関係、第二巻は文学関係、第三巻は歴史・思想関係を内容とし、多数の執筆者が関わります。

これは、白川学の全体的紹介を目的とするもので、当研究所叢刊二、同三、同四として平凡社より出版することになりました。今秋以降に刊行の予定であります。ぜひお求めいただけますよう、切にお願い申し上げます。

第二は、来年度四月より、本学としましては始めての「白川学の世界」と題する講義科目(前期二単位)を衣笠キャンパス全学部において開講することになりました。将来、びわこ・くさつキャンパスにおきましても開講したいと希望しております。

第三は、中国古代文字学研究を行う研究者に対して、研究費を正式に出して支援するとともに、同方面に関心のある学生の指導を實質化してゆきたいと思えます。

第四は、白川家から御寄贈いただきました、白川先生旧蔵書の整理を、目下、図書館にしておりますが、その整理の完成をめざしております。

(二) 普及活動

研究所主催で、漢字教育の方法につきましての研修講座を開き、その修了者に対して、修了認定を行なうべく、そのガイドラインとなるカリキュラム編成をいたしたいと思えます。受講者は、産業社会学部の子ども社会専攻(小学校教員免許状取得可能)者や、文学部の教員免許状(国語)取得希望者を考えております。将来、他大学学生や一般社会人にも枠を広げてゆく予定であります。

第二は、児童を対象とする漢字探検隊という従来の行事は今後も拡大的に続け、一般社会との関係を緊密にしてゆきたいと思えます。

第三は、平成二十二年四月が、白川先生の生誕百周年に当たりますので、その記念行事を計画しております。

第四は、卒業生の内、白川先生の受講生であった方々に呼びかけ、昨年十一月、白川会はくわんという組織を作りました。これから、同会員には、さまざまな形で研究所に御協力、御支援をいただくことになると思えます。以上が、私の着任以後の取り組みでありまして、すでに展開中であり

ます。

その次は、『白川学ハンドブック』を作り、さらに広く白川学の普及をめざしたいと思います。

また、前記の漢字教育研修の修了認定は、広く小学校教員あるいは教員志望者を対象とする全国展開を構想中であります。

研究につきましては、当研究所主催の研究会の設立を検討中でありま
す。その際、可能でありますならば、メンバーは全国的視野で考えたい
と思っております。

なお、従来の『研究所紀要』刊行・データベース作製等の活動は、も
ちろん、今後も継続いたします。

研究所のホームページは、当学大学院文学研究科の大学院学生（中国
文学専攻）に依頼しまして、白川先生の著作から、適宜、ことばを選び
出して掲載し、蓄積し続けていきますので、御高覧下さい。

* * *

なお、昨年、松岡正剛著『白川静 漢字の世界観』（平凡社新書）が刊
行され増刷が続いています。おそらく白川静先生の御業績の紹介として
最も広く読まれていると言えましよう。それは慶事であります。

しかし同時に、いささか複雑な気持ちでもあります。と言いますのは、
そのような刊行物は、本来、白川先生の受業生、あるいは当研究所が担
当すべきではなかったのかという思いがあるからです。

遅ればせながら、前述の『白川学講座』がその役割の一端を務めるこ
とになるうかと考えております。私たちは、まずなによりも客観的な紹
介をいたしたいと思えます。執筆者の個人的見解ではなくて、あくまで
も白川学の等身大の姿を示してゆきたいと思えます。

その意味では、教科書的になるかもしれませんが、現段階ではそれが
必要と思っています。白川学についての解釈は、その次の段階の話と考
えております。

白川静先生と中島敦と

副研究所長 木村 一信

今年（二〇〇九年）も、生誕百年を迎える日本の近現代文学史に名前
をとどめる幾人かの文学者たちがいる。たとえば、太宰治、大岡昇平、埴
谷雄高、松本清張といった人たちは百年前の一九〇九年（明治四十二年）
に生まれている。それに加えて、いま挙げた人たちと同年の生まれであ
りながら、最も早く逝った作家として、中島敦の名前も忘れてはならな
い。

その中島敦の作品に、「文字禍」という短篇小説がある。小品ながら、
これまで多くの人人に言及され、着目されてきている作品で、「文字の靈^{れい}
などというものが、一体、あるものか、どうか」と書きはじめられてお
り、その研究に携わる「老儒ナブ・アへ・エリバ」を描き出す。作中に、
次のような記述がある。

…一つの文字を長く見詰めている中に、何時しか其の文字が解体し
て、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。単
なる線の集まりが、何故、そういう音とそういう意味とを有つこと
が出来るのか、どうしても解らなくなつて来る。老儒ナブ・アへ・
エリバは、生れて初めて此の不思議な事実を発見して、驚いた。

いま、中島作品の一節を引いたのは、白川静先生のご長女の津崎史さ

んから聞いたあるエピソードと関連するからである。白川先生が、亡くなられる数週間前にご入院された折、先生は、病院の天井を見つめて、そこに残る模様（おそらく、シミか壁の亀裂などと思われるが）が、漢字の一部に見えるとおっしゃって、ああでもない、こうでもないときいておられたという話である。つまり、何らの線の跡、もしくは線の交錯、集まりは、先生にとっては、とりもなおさず、漢字につながるものであつて、そのことを長年にわたつて考え続けてこられたことからくる習性に近いものとなつていたのではないだろうか。中島の表現する「単なる線の集まりが、何故、そういう音とそういう意味とを有つことが出来るのか」と、先生も考え続けられて、あの大きな白川文字学の世界を構築されたのではないか。津崎史さんから、病院でのエピソードをお聞きした時、私は、すぐに「文字禍」の文章の一節を思い浮かべたのである。

中島敦といえは、いまひとつ、白川先生とのつながりを想起する。それは、先生の『孔子伝』であり、その第五章中の「弟子群像」という文章である。ここで先生は、孔子の弟子の子路と顔回とを中心に述べておられるが、特に子路を描出した箇所が興味深い。弟子の中で、孔子との年齢差が最も少なく（九年の差）、やんちゃで、元「武俠不逞の一人の男」（『孔子伝』）であつた子路は、まったく弟子中では異色の存在であつた。が、孔子は、最もこの弟子を愛し、信頼した。そのさまが、白川先生の『孔子伝』に活写されているが、周知のように、中島敦にも「弟子」という作品があり、この子路を主人公としている。

魯の下の遊侠の徒、仲由、字は子路という者が、近頃賢者の噂も高い学匠・陋人孔丘を辱しめて呉れようものと思ひ立つた。似而非賢者何程のことやらあらんと、蓬頭突鬢・垂冠・短後の衣という服装で

と書き出されているこの作品は、中島の人間を捉える見方がよくあらわれている。また、中島の描いた孔子の子路観は、白川先生の見方と近いところがある。と言うより、中島作品の方が先に書かれているから、中島に近いと言うべきであろう。あらためて、私は、中島敦と白川静というテーマでまとまりのある文章を書きたいと思うが、いまはこうした指摘にとどめておきたい。

白川静先生は、この中島敦の生まれた翌年、すなわち一九一〇年（明治四三年）のお生まれである。来年（二〇一〇年）、その生誕百年の年を迎えるが、相ついでに漢字、古代中国学に通暁した文学者と文字学者の出現は、日本の文化史上にとって多大の意味を有するものであると思う。

（立命館大学文学部長）



白川静先生『孔子伝』の基になった「孔子の生涯」「儒の源流」
（中央公論社「歴史と人物」1971年10月号と72年1月号）



『中島敦全集』（筑摩書房）

水利碑刻

運営委員 本田 治

最近ようやく堰や農業用貯水池や堰、隄防など歴史的に有名な水利施設を現地で見ることができるようになった。地形図と文献とに頼って進める水利史研究には不安があり、実際に自分で見て確かめたいという思いは強かったのだけれども、なかなか果たせなかった。それは私自身の怠惰にもよるが、歴史的水利施設の多くが観光地でもなく、都市からかなり離れた農村部に多く存在しているので、何のつてもない外国人には近づきにくかったことが主な理由である。たしかに実際行ってみると、百聞は一見にしかずで、長年の疑問が一瞬にして氷解することもある。石碑との出会いも現地を訪ねる楽しみの一つである。碑文は水利史研究の貴重な情報源で、昔風にいうと一次史料である。目的地に着くと、施設を一通り見おわると、創設や修治の事績を記した石碑がないかとあたりを見回す。付近の人家に聞きに行くこともあるが、大抵の場合、写真をとったりノートをとったりしていると、黙っていても人が集まってくる。大抵はおじいさんで、なぜか女性や若者は遠巻きにしてあまり近寄ってこない。私たちにとってこの何処からともなく現れるおじいさんたちがありがたい情報提供者で、彼らの存在なくして「調査」は成り立たない。自分たちが手に負えなくなると物知りのおじいさんと呼んできてくれる。分かりにくい石碑の在りかを教えてくれるのもこのおじいさんたちである。

碑文は水利史に限らず歴史研究にとって貴重な史料源であるが、中国の水利史研究では特別の意味をもつ。中国の水利史研究は自国史の一環として先人の成し遂げた技術遺産を顕彰し現代に役立てるといった視点からなされることが多いのに対し、日本では水利利用の外延にとり結ばれる社会的諸関係、すなわち水利組織・村落・王朝国家などに強い関心が向けられてきた。これら諸関係は現場に立つても何も見えてこない。ほとんど文字史料の分析から得られる。それも正史や実録などの官撰史料は、地方の水利の権利関係などには関心はなく言及することは稀であり、最大の情報源は創設・修治を記念して作られた碑文である。碑文のいくつかはその後、撰者の個人文集や地方志の金石や藝文の項目に収録されこともあるので、必ずしも現物を見なくても大きな不都合はないのだが、たくさんの論文が引用するような有名な碑文に直面すれば感動もあるし、時にはどの文献にも引用されていない碑文に出会えるかもしれないという期待もある。

そもそも現存するたぐさんの水利碑はその造立に何を託したのだろうか。そんなことを考えるようになったきっかけは、だいぶ前に見た中国映画であった。邦題を「古井戸」（原題「老井」一九八七年）といい、張藝謀が初めて主演した映画であり、映画としてもいくつもの賞をとった作品である。舞台は山西省の老井村という山間の寒村で、人びとは山腹にへばりつくように生活している。この村の悩みは往復十キロの道を水汲みに行かなければならないことである。だから井戸を掘り当てることは村の悲願であり、村人は清朝以来えんえんと掘りつづけてきた。そして今以前に枯れてしまつて放棄された古井戸を修復しようとしている。この映画のなかで二度石碑が登場する。一つは村の書記が若者たちに井戸を掘りついでいくように諭す場面で、成功したら君たちの名前を碑に刻つてやろうと励ます。成功しなかつたらもう井戸を掘るなと書くという。後世への戒めの石碑というのはその例を知らないが、文字通り最

初に井戸を掘った人への感謝の気持ちを忘れないというのは、日本でもよくある顕彰碑である。もう一つは工事中の古井戸をめぐる隣村との争いの中で登場する。ある日隣村の住民が押しかけて、もともとこの井戸は自分たちの村のもので、老井村にはこの井戸を使う権利は無いと宣言して土砂を投げ込み始める。騒ぎを聞きつけた老井の村民もシャベルや鍬をもって駆けつけ、双方古井戸を挟んでにらみ合う。老井村側は碑文の記載によればこの井戸は昔二つの村が協力して掘ったものであり当方にも権利があると反論する。隣村はそんな証拠はどこにある？とやり返す。実は予め碑面を削り取ったうえでこの挙に出たのである。証拠を出せない老井村は沈黙する。すると群集の中から女性が一人進み出て、むかし観音堂にあった石碑にも同じことが書いてあったという。その石碑はどこにある？と隣村が応じる。一瞬静まり返ったあと、件の女性が言う。「うちの厠の踏み板になっいる」と。どっと笑いがおこる。さっそく石碑が運び込まれる。分が悪くなった隣村は再び井戸に石ころ投げ込みはじめ。老井村の長老が言う。「長いことやってねエーが、こうなったら械闘するしかない。」と。あとは双方入り乱れての大乱闘となる。水利をめぐる械闘は近年あちこちで起こっているとも聞く。

この映画を見てなるほど古人が水利碑に託した意味が何であったかを実感できた。老井村の住民は二百年経っても碑の存在を記憶しその意味を理解していた。そして必要な時にその存在を有効に利用している。確かに水利碑の記述は修築に要した資金・労働力の量、拠出者、日数、責任者など具体的に詳細にわたっている。その詳細さが後世の研究者に大いに役立っているけれども、出資、出役の記録の本当の意味は水の権益と表裏していることは間違いない。水利事業の場合、工事の竣工がその終了ではなく、当事者にとっては、後々の権益の保障として文字で記録されてはじめてその事業は完結する。その記録は撰文者が署名であればもっとよい。個人文集などに再録されれば、権益の根拠となる。その上

石に刻まれれば、時の経過による風化を防ぐことができる。

二月と三月に寧波郊外や隣の上虞県の水利施設を見て歩いた。概して水利関係の碑は修復して建て直されたりして大事にされているが、今回も他の石材と一緒に壁に立てかけてある清代の茶会碑を見つけた。墓石などはあちこちで建築材として再利用されているのも見かけた。私などは足元の石段に文字を見つけると思わず踏むのをためらってしまうのは、小さいとき新聞を踏むなど教えられてきたせいだろうか、長年漢字を相手に過ごしてきた職業的習性からだろうか。せめて刻字面を裏にすれば良いのにも思ってしまうが、漢字の発祥の彼の地の人々は意に介さないらしい。

上虞県の新通明堰というところに行つた。むかしそこは三つの水路の合流点で杭州と寧波を結ぶ交通の要衝の一つであった。写真をとったりしている我々を日向ぼっこしているおじいさんがじっとみている。いつものパターンである。まず彼に水路の名前から聞いてみる。「この河は八里河ですよ。」すると、「いや十八里河だ。」「地図には八里河とありますが。」「昔から十八里河だ。」「こんなやりとりをしているうちに四五人に増える。みな十八里河だという。地図の方が間違っているらしい。次ぎに「あちらに河は地図に名前がないのですが、何と言いますか。」と質問すると「ピャオホだ。」「どんな字ですか」と言つてノートを差し出すと「漂」と書いてくれる。すると別のおじいさんが、いや確か「滌」と書くはずだという。また別の人物が別な字を書く。我々そつちのけで熱い議論が始まった。そのうち漂のおじいさんが、むかし河の近く漂の字を書いた石碑が立っていた、だから漂が正しいと言う。思わぬ展開にもしや新発見と期待がふくらむ。すぐに「その石碑はいまどこにあるのですか」とたずねると、連れて行ってやるという。ぞろぞろと彼の後をついて行くくと、幅一メートルほどの水路に懸かったコンクリートの板を差して是だという。石碑を水路にわたしてまわりをコンクリートで塗りこめてし

まったらしい。ぬか喜びであった。まア、おじいちゃんここまで自信をもって言うのだから「漂河」なのだろう。もう一步というところだったけれども、名なしの河の名前が判っただけでもよしとしなければならぬ。そうそううまい話はない。



船を引き上げるスロープに再利用された墓石（鄞県莫枝堰）

『甲骨学一百年』を読む会の報告

研究員 高島 敏夫

昨年の二月から、研究所の小さな活動として『甲骨学一百年』（社会科学文献出版社 一九九九年）を読む会を始めました。この書物は甲骨文発見から数えて百年に当たる年に出版されました。主編者には重鎮的な存在である王宇信と楊升南が当たっています。全七一七頁の大冊です。他に孟世凱・宋鎮豪・常玉芝の三人が執筆者として加わっています。

この書物は単なる回顧的な文集ではなく、甲骨学がこの百年の間にとどのような努力によってどのように発展してきたかということ、人とその仕事を詳細に紹介しながら辿っています。主編者の王宇信が甲骨学の世界において大変優れた学者であることは周知のことですが、先人たちが甲骨学の発展の中でそれぞれに果たした重要な役割に対しても深い敬意を懐いていることが直に伝わってきます。そうした敬意が読者である私たちの中にもいつの間にか生まれていて、共感を覚えること頻ります。若い研究者はとかく自分の研究の新しさを強調するあまり、先人の仕事を軽んずる傾向がありますが、先学の努力がなければ甲骨文が読めなかったはずですし、また甲骨文が読めなければ資料としても用いることはできなかつたでしょう。この書物が単なる回顧的な文集ではないとしたのは、甲骨学が今後どのような方向を志向するのかということについても言及があるからです。

「第一章 緒論」から始めて「第二章 百年出土甲骨文述要」「第三章

甲骨学研究基礎工作的不断加强」「第四章 甲骨文的考釈及其理論化」「第五章 甲骨文的分期断代」と進んできました。現在「甲骨文的分期断代」が進行中です。この章は甲骨研究の上では最も重要でありながら、なかなか決着がつかないところなので、じっくり問題点を整理しながら進めています。

最初に我々の目を惹いたことを記しておきます。王宇信は第一章「緒論」の中で、「甲骨学商史研究の新しい道」として、「新時代には、新しい立場に立ち、新しい観点・方法を用いて、新しい甲骨文字の研究を行なう。」とした後、次のようなことを述べています。

① 伝統的な文字考釈の方法の土台の上に、新しい理論を提示して、古文字研究を前進させる。

② 弁証法を運用し、文字の点画や偏旁及び文字と音義の關係に分析を加え、新しい道を開く。

③ 古文字だけを孤立的に研究するのではなく、社会发展史の角度から、また世界の古代史と少数民族志に保存されている原始民族の生産・生活・社会意識等の方面からも古文字の起源を追跡してはじめて、古文字の造字本義に対する正しい理解がなされるのであって、同時にまた、われわれが古文字資料を正しく解説する助けになるのである。これが今後の甲骨文字の解釈に全く新しい道を開くのである。

としています。特に③の内容は、「白川文字学」の方法そのものです。「白川文字学」という名前こそ用いられませんが、中国の甲骨学の志向する方向が見えてくるように思われます。

他にも注目すべきことがありますので、紙面の赦す範囲で紹介しておきます。

次いで注目しておきたいのは、甲骨文の発見された年が一八九九年で

あるのは公式の認識ではありませんが、当初から殷代の文字であると見なされたわけではありません。むしろ当初は「周文」すなわち周代の文字とされてきました。なぜでしょうか？ それは西周時代の文字である金文（青銅器に刻された文字）に非常に近い字形であったからです。字形だけからすれば「周文」と呼ばれても何も不思議なことではありません。しかし解説が進むにつれて、「周文」で記された内容が西周時代よりもさらに前の殷代のものであることが明らかになって、「殷契」という言葉も使われるようになって行きました。いまここに挙げませんが、当初様々な名称で呼ばれた殷墟出土文字に「甲骨文」という語が使われるようになるのは、一九二一年の陸懋徳《甲骨文之發現及學術價值》以降のことです。今となつては文字の名称などあまり重要な事柄とは思われなかも知れませんが、「甲骨文」という呼び名に定着するまでの過程にも、甲骨学の興味深い歴史があります。

このことと関連して付言しておきたいことは、甲骨文を発見した人は王懿榮であるという認識が必ずしも適切ではないということです。またこれまで信じられてきた興味深いエピソードとも関わってきます。マリアに雇った王懿榮が、よく効く薬として知られていた龍骨を買い求めたところ何やら古い文字が記されていることに気付いたのが甲骨文の発見である。といったことが今でも事実として語られることが多いのですが、前述したことからも分かるように王懿榮は「周文」という認識をもつたまま、「発見」の翌年である一九〇〇年に亡くなってしまいました。つまり殷代の文字であることを知らずに亡くなっているのです。

殷墟すなわち安陽は古来骨董商が活発に往来する地域でもありました。彼らは安陽の小屯村から出土する青銅器などの古器物を仕入れては、北京・天津・上海行って高値で売るといふ商いをしていました。骨董商は古器物に関する知識が豊富ならばかりでなく、かなりの程度の学問的知識ももっていましたから、青銅器に彫られた金文についても偽物と本物

を見分けるだけの鑑識眼はもっていたはずで。そうした知識を持っている者であれば、亀甲や獣骨に刻された文字が「周文」であることなど一目瞭然であったでしょう。そう考えれば、甲骨文を最初に発見した人が王懿榮であるという認識は、興味深いエピソードとともに作り上げられた後世の作り話であることが分かります。では最初に発見したのは一体誰なのでしょう？

もう一つ興味深く感じたことを紹介しておきたいと思います。それは欧米人の学者にもちゃんと目を向けていることです。日本人が中国に関する学問ができるのは、訓読というユニークな技術を我々の祖先が考案したことによるものですが、それだけに欧米人が漢文を読むのは難しいと思いがちで、欧米の学者をどこか軽んじる風潮があります。この甲骨学の歴史においても欧米人などはほとんど関わることがなかったものと考えられがちです。あったとしても收藏家として名前を知っているだけで、甲骨学の学者としては一顧だにしないというところではなかったかと思えます。

しかしこの書を読み進める中で、收藏家として有名であったカナダの明義士 (James Mellon Menzies) が優れた学者であったことを知ることができました。現在もなお決着を見ない甲骨文の分期断代の研究において、この明義士が先駆的な仕事を残していたことを知ったのは驚きです。この明義士の文章は一九二八年に書かれていながら未発表のまま埋もれていたもので、分期断代の議論が再燃しはじめた一九八一年に李宇勤によって一度紹介されたことがあるのですが、この書の中で王宇信によってその先駆性が改めて称揚されました。今ではすでに埋もれてしまっている先学の業績がこのような形で称揚されることはとても重要で、こうした先人の存在を知ることとは一種の喜びであると同時に、先学への敬意を新たにする契機となります。このような出会いが学問をする上での謙虚さに繋がります。

学生諸君との白川文字学勉強会

研究員 高島 敏夫

昨年度に引き続き有志の学生諸君と一緒に、へ白川文字学の原点に還る」という目標を掲げて初期論文を読む会を進めてきました。今年度は「釈史」を読みました。

「釈史」は初期論文の中では最初に発表されたものです。とりわけ重要なのは、この論考の中で、一般に口偏として知られる「口」字形が実は祝辞(詞)を入れる器であることを、実に綿密な考証を重ねて論証されたことです。「口」字形が祝詞を入れる器である」という解釈は、白川文字学に関心のある人であれば「字統」や「字通」あるいは「漢字」や「漢字の世界」といった一般書で見られるので、わざわざ申すまでもないことですが、結論自体は有名なのに、そのような解釈にいたる論証過程は知らない、という人が多いのが実状ではないかと思われます。白川文字学を学問として学ぼうというのであれば、文字が構築されていった過程そのものを知ることが重要です。そういう意図で熱心な学生諸君と質疑応答を交えて読み進めてきました。時には彼らの鋭い問題意識を感じる場合もあり、驚くこともしばしばありました。この「釈史」は白川先生の初期論文の中でもとびきり難しい文章なので、読み進めるのが大変だっただろうと思いますが、粘り強く読み進めることができました。なお、「釈史」を少しでも読みやすくするために、「読『釈史』」という拙文を「白川静記念東洋文字学文化研究所紀要」に寄稿しておきましたので、参考にしていただければ幸いです。

二〇〇八年度 学術活動報告

運営委員 芳村 弘道

研究会報告

二〇〇八年十一月三十日午後一時から当研究所の第三回研究会が衣笠キャンパス学術館二階第三研究室にて開催された。今回は下記の通りの研究発表が行われ、それぞれについて発表者と参加者との意見交換が活発になされた(午後五時半終了)。

「稷」字の成立とその義について 張 莉

金沢文庫本白氏文集卷三十一『中書制誥』の漢字字体について

— 卷十二『長恨歌』との対比の観点から —

當山 日出夫
(敬称省略)

「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第三号の発刊

当研究所の研究誌「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第三号が二〇〇九年三月に刊行された。本号には論文五篇のほか、譯注一篇が掲載されている。細目は次の通り。大方の御一読をお願い申し上げる。

論文

讀「釋文」……………高島 敏夫 1

— 白川文字學の原點に遡る (二) —

「稷」字の成立とその義について……………張 莉 17

中國における日本詞研究について……………萩原 正樹 37

金沢文庫本白氏文集卷三十一『中書制誥』の漢字字体について……………當山 日出夫 55

— 卷十二『長恨歌』との対比の観点から —

譯注

董康『書船庸譚』九卷本譯注 (三)……………芳村 弘道 65

論文

古今和歌集元永本における短歌表記の漢字……………石井 久雄 7

研究員の主な研究活動

○上野 隆三

「中国明清白話文学研究」

講演 「現代中国電影 — 多様化する中国映画とネット社会 —」

立命館土曜講座第二八六八回 (二〇〇八年九月二十日)

○小森 伸子

論文 「大学生の「読書」概念に関する予備的検討」

摂南大学教育学研究, 5, 33—43.

○高島 敏夫

「研究テーマ」 「白川文字学の体系の研究」

論文 「殷末先周期の殷周關係 — 周原出土甲骨讀解試論」

(「学林」四六・四七号) 「白川静先生追悼記念論集」(二〇〇八年三月)

「西周時代における「天命（命）」と「大令（命）」

——「天命（命）」「大令（命）」の意義變遷が示すもの（一）

〔学林〕四八号、二〇〇九年三月

「讀」釋史——白川文字學の原點に還る（二）

〔白川靜記念 東洋文字文化研究所紀要〕第三号、二〇〇九年三月

○萩原正樹

「唐宋詞および日本詞學研究」

二〇〇八年度は、主に『欽定詞譜』の版本に関する研究と、明治大正期の詞人を中心とする日本詞についての研究を行った。

論 文 『欽定詞譜』内府刻本二種の異同について

〔学林〕第四六・四七号、白川靜先生追悼記念論集、二〇〇八年三月

「中国における日本詞研究について」

〔立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要〕第三号、

二〇〇九年三月

研究成果報告書

「日本における詞の収集と整理」

（平成一八〜一九年度科学研究費補助金

（基盤研究（C））研究成果報告書、二〇〇八年三月

資料紹介 「竹磯詩詞文拾遺 附鷗夢樓詩集題詞及序」

〔立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要〕第二号、

二〇〇八年三月

講 演 「日本詞与日本の中国詞学——兼談近十五年日本詞学研究的新發展——」

（二〇〇八年九月、武漢大学文学院）

○本田 治

「宋代水利史研究」

論 文 「Development and Migration in Coastal Ming-chou during the Sung」

〔『國際東方学者會議紀要』第五二冊、二〇〇八年一月）

「明代寧波沿海部における開發と移住」

〔『立命館文学』六〇八号 93・129頁、二〇〇八年十二月）

研究発表 「宋代江南填湖与復湖運動」

（二〇〇八年古代堰壩工程歴史価値及其保護利用國際學術

検討会、於四川成都、二〇〇八年十月二十三日）

○芳村 弘道

「唐代文学研究・漢籍書誌学研究」

二〇〇八年三月二十九日から九月二十三日まで、上海の復旦大学中文系に訪問教授として在外研究を行い、同大学図書館や上海図書館の古籍部所蔵の唐代文学関係の漢籍古書を調査、研究した。また北京の国家図書館で宋版『白氏文集』などの善本や天津の天津博物館所蔵古鈔本『文選集注』残巻を閲覧した。

論文 「唐詩の新資料・朝鮮本『夾注名賢十抄詩』をめぐって——『千載佳句』との関連——

〔和漢比較文学〕第四十号、二〇〇八年二月

「孤本朝鮮活字版『選詩演義』と撰者曾原一について」

〔学林〕第四十六・四十七号、「白川靜先生追悼記念論集」、

二〇〇八年三月

訳註 「董康『書舶庸譚』九卷本譯注（二）」

〔立命館白川靜記念東洋文字文化研究所紀要〕

第三号、二〇〇九年三月

講演 「白居易《醉吟先生墓誌銘》之真偽」

（二〇〇八年六月三〇日、復旦大学。このほか浙江大学・南京大学・南開大学・西北大学・武漢大学においても講演を行う）



講演の機会に訪れた「東坡赤壁」（湖北省黄冈市）白川先生も愛された宋・蘇東坡の名作「赤壁賦」の旧跡

二〇〇八年度 文化事業活動報告

文化事業担当 久保 裕之

文化事業運営委員会では、研究所設立の四年目にあたる二〇〇八年度に、白川文字学の一般への普及と、ネットワーク作りに重点を置いて、以下の活動を展開した。

「好奇字展―白川静と東洋文字文化の世界」展

二〇〇九年一月七日から十七日にかけて、立命館大学衣笠キャンパス以学館において「好奇字展―白川静と東洋文字文化の世界」を開催した。



白川静先生が生涯思いを馳せられていた「東洋」。東洋の文化的な結びつきを担ってきた漢字。また各民族が産み出していった様々な文字文化。「東洋」に魅せられ、文字を通してその姿を解明されようとした白川先生の業績や、東洋文字文化に触れる試みを融合させた展示を目指した。

この展観は三つの部分から構成された。第一部は「東洋文字文化」のコーナー。これは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が二〇〇七年二月から三月にかけて行なった「好奇字展―東アジアの文字周遊」での展示を基にしている。漢字はもとより、女真文字・契丹文字・西夏文字・チュノムなど漢字から影響を受けて作られ、現在では使用されていない文字や、現代に生きる象形文字として知られるトンパ文字（中国雲南省居住の納西族の文字）やモンゴル文字・アラビア文字・チベット文字・ロロ文字（中国四川省を中心に居住の彝族の文字）・朝鮮文字など現在でも使用されている文字、さらには中国湖南省の一地方で女性だけが用いている「女書」など、東アジアの様々な文字を一堂に集めた。漢文・契丹文対比の墓碑や過去の印刷資料からは、東洋文字文化の源流をたどることができた。また、字典、新聞、チベット語版『ナルニア国物語』やロロ語版「元素周期表」などこれらの文字が現在でも生きていることがうかがえた。

今年度は、京都だけにとどまらず、広島、神戸、北九州での開催が実現した。また東京では有限会社メディア・ハーモニー、文京教育サポートーズとの共催により「東京漢字探検隊」開催が実現、京都と同じく約二ヶ月に一度の定例開催となっている。来年度は、さらに宮城県での開催が決まっている。今後も共催者を求めて全国に拡げていくべく活動を行っている。



学内他組織との連携事業

二〇〇八年十月下旬から十一月初旬の一週間には、立命館大学国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色 文字・活字文化の日 特別企画」を開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

福井県との連携

福井県は「白川文字学」を学ぶテキストと字典を編纂し、本年度から県内すべての公立小学校で学習する取組が始まった。また県立図書館跡地を「福井子ども歴史文化館」として整備し、白川静をはじめとする郷土の偉人の業績を展示することとした。(二〇〇九年十一月開館予定)
白川研も都度アドバイスを行い、二〇〇八年十月に行われた県教育委員会主催の「まなびフェスティバル」に招かれ、「漢字ジェスチャー大会」を開催、好評を博した。



白川文字学の普及活動者とのネットワーク構築

全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りに着手。書籍刊行や講座開催など具体的な成果が現れている。

①小寺誠氏（京都府南丹市立西本梅小学校長）著の『白川文字学に学ぶ―漢字の知恵を生きる力に（仮題）』の監修。平凡社からの刊行は二〇一〇年初めを予定している。

②学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会（学力研：小学校教員を中心とした自主学習組織。ここでの実践から「百マス計算」などが生まれた）夏の全国大会での発表。漢字部会での報告。会員所属校などでの漢字講座開催（大阪市・大阪府箕面市・神戸市・兵庫県加古郡・群馬県前橋市）

③出張講座：京都市立音羽小学校PTAおよび広島県尾道市立土堂小学校PTA主催の親子講座、山口県立水産高校主催の教研集会、兵庫県川西市明峰公民館の一般向け講座に招かれた。

第三回立命館白川静記念東洋文字文化賞（立命館白川静賞）

第三回立命館白川静賞の選考は二〇〇八年十一月に行われたが、今回は「該当者なし」との結果となった。二〇〇九年一月十一日には「好奇字展」のイベントとして「立命館白川静賞記念講演会」を開催、石塚晴通・北海道大学名誉教授（第一回立命館白川静賞受賞者代表）による「漢字字体規範データベース（HNG）について」と題する講演を行った。第四回からは、より広い層の研究・実践などを顕彰できるように、募集方法や表彰内容をリニューアルすることになっている。

二〇〇九年度は、既存事業の継続・発展とともに、一般向け講座の企画実施を目標に活動を展開し、引き続き「白川静文庫」が開設される二〇一〇年度（生誕百周年）に向けての企画構想期間としたい。



編集後記

○昨年、本誌前号の「編集後記」に、白川静先生の生涯や御業績をあらためて評価しようという動きが起こっている、と記しましたが、今年度も益々その動きが強まっています。松岡正剛氏の「白川静・漢字の世界観」（平凡社）が発売直後から全国書店の新書売上げ一位となり、十万部を突破する勢いであることなどが、その顕著な例でしょう。ほかにもさまざまな成果が生まれましたが、ここでは特に注目すべき論考を二点、紹介しておきたいと思えます。まず一点は、中原章雄本学名誉教授が書かれた「小説家高橋和巳再読―ある研究室伝説の誕生―」（立命館文学）第六〇六号）です。高橋和巳の「わが解体」に「S教授」として白川先生の姿が描かれていることはよく知られていますが、中原先生は本稿において、その高橋の記述の特に団交に関する後半部分は作家高橋の想像力の産物であり、虚構であると論じられています。詳細はぜひ原文を御覧頂きたいと思いますが、中原先生は、当時学生主事代理として紛争を間近に見てこられた方であるだけに、その証言には説得力があります。高橋は、深夜の校庭の暗闇にポツンと灯る白川研究室の光を象徴的に描いています。紛争時の広小路キャンパスでは深夜も不夜城のように電光が満ちて研究室の明かりなどはすっかり埋没し、拡声器から流れる大音響のインターナショナルや北京放送がキャンパスを揺らすという、光と喧噪に満ちた世界であったと中原先生は説かれます。そしてそのような状況の中にあつて、研究室外の空気を敏感に感じとりながら、時には夜明かしをするほど研究に精励された白川先生の姿を描き出しています。「わが解体」の「S教授」像は、現在においても一般の方々が描く白川先生のイメージに大きな影響を与えているように思われます。もちろん高橋和巳が記した「学問の威厳によって学生たちを圧倒する偉丈夫」というイメージにも一面の真実が込められてはいますが、そのイメージだけが固定化し一人歩きすることのないように、特に白川先生と身近に接したことのある方々からの発言や検証が今後おおいに現れることを期待したいと思います。注目すべき論考のもう一点は、これまでほとんど言及されることの無かった白川先生の歌業について論じた、安森敏隆先生の「歌人・白川静の誕生」（安森敏隆・上田博編「ポトナムの歌人」所収）です。白川先生は、小泉三三先生の薫陶を受けられて学生時代に短歌をはじめ、「ポトナム」や「くさぶち」に作品を発表し、二〇〇一年には「ポトナム」の名誉顧問となられました。その先生の歌について安森先生は「短歌は『いのち』の根源をうたうものである。その『いのち』の根源の歌が妻の病氣とへ死へによって醸成され、平成十七年の『卯月抄』の妻に捧げる歌となって結晶したのである」と述べ、奥様の臨終の際に詠まれ

た歌を「挽歌であるが、相聞歌にも通底する」として高く評価されます。その中の一首「飛行雲西に崩れて流れたり天翔りゆく魂（たま）もあるべし」は、平成十六年四月六日、病院で奥様の御臨終を見守られたあと自宅に戻られる際の作と思われる。西京区桂の上空は飛行機の航路となっており、しばしば飛行機雲が見られますが、その一筋をいままさに天に帰ろうとする奥様の魂の軌跡とみなして、深い鎮魂の思いが詠みこまれています。このような先生の短歌の高い抒情性や、たとえば詩経の訳業などに見える文学性等については、従来あまり論じられておらず、今後の研究の充実が望まれます。○本号冒頭には、昨年五月に着任されました加地伸所長の一文を掲載いたしました。加地所長による新しい体制のもと、研究・教育活動と普及活動を二本の柱として、当研究所は引き続き努力を傾けていく所存です。各位のさらなる御理解と御支援をお願い申し上げます。

○木村一信副所長による「中島敦と白川静先生と」では、中島敦の作品と白川先生とのつながりについて興味深い指摘がなされています。それぞれの活躍の時期が異なるためか、太宰治、大岡昇平、埴谷雄高、松本清張、さらに中島敦が同年の生まれであるという事実にも驚かされますが、白川先生がその一歳年下であるというのも意外に思われます。木村副所長が最後に触れ、また加地所長の文章でも言及されておりますように、二〇一〇年は白川先生の生誕百周年に当たり、当研究所ではその記念行事を計画しております。

○本田治運営委員からは「水利碑刻」と題する文章を寄稿頂きました。中国水利史を専門とされる立場から、水利碑は当然貴重な史料源ですが、同時に碑文の裏に隠れている、水利碑の建立に託された住民たちの思いについても、映画「古井戸」を例として言及されています。末尾に記された、石段の文字を「踏むのをためらってしまう」というエピソードは、筆者も中国において経験したことがあります。漢字は、単なる記号ではなく、その奥にさまざまな人々の生活や思考、感情が盛り込まれています。文字を大切に思うことは、その国の人々や文化を尊重することにつながると思えます。ですが日本においても特に近年、自分たちの文化的伝統や貴重な遺産を軽視する風潮が強まっていますように感じます。白川先生がしばしば言っておられたことですが、漢字や漢文は、日本人にとつて決して借り物ではなく、音訓を用いる以上いはば国字なのであり、これらを軽視することは自らの文化を「厠の踏み板に」してしまう行為と同じではないかと思えます。

○高島敏夫研究員による勉強会と読書会の報告、芳村弘道運営委員、教育文化事業部・久保裕之氏による研究事業と文化事業の報告は、いずれも今年度の主要な活動報告です。来年度も、加地所長の文章にありますようにさまざまな活動を計画しておりますので、おおいに御期待下さい。